

75年前の1945年、8月6日 広島へ、それからわずか3日後の 8月9日 長崎へ、原子爆弾が
續けて 投下されました。そして 更に6日後の 8月15日、この国は ついに 敗戦の時を迎えました。
当時 この瞬間を生きていた人達は 何を想ったのでしょうか。“戦争”とは いったい何なのでしょう。
私が この世に生まれてから今日までの日々、私は 戦争を一度も経験しないで 生きて来られました。
なぜでしょうか？ それは 戦争を経験し、その惨さを知っている人達が もう二度と戦争をしないよう、
この75年間、平和を心から願い、必死に守り續けて来てくれたからです。その 切なる祈りによって
こうして 私達の今が在るということを、私達は決して忘れてはなりません。そして何より大切なのは
あの時、普通に日常を生きていた 数えきれないほど たくさんの 名もない人々の命が、戦争によって
犠牲になったこと、美しかった素晴らしい自然や そこに生きる小さな命たちが 無残に壊されたこと、
この事実を、後に生きる私達一人ひとりが、痛みをもって 永遠に憶え續けていかなければなりません。
戦争を知らないからこそ 戦争を知るべきなのです。なぜなら、“私達の今”は、犠牲になった多くの
尊い命の上で築かれているからです。75年前の事実を 他人事にしたり 物語に変えてはなりません。
祈りを込め 渡された平和のバトンを守り續けるため、戦争の惨さや恐怖を知る使命と責任があります。
戦争を体験された方々の話を聞いて 知ること、人間の五官の機能をすべて駆使して想像することです。
まもなく「終戦記念日」が訪れます。当時の人々にとって どんな想いで迎えた瞬間だったのでしょうか
ありふれた日々の中、それぞれが置かれた場所で 今一度 立ち止まり 想いを馳せてみたいと思います。
「記念日」とは そうやって立ち返るチャンスの時なのではないでしょうか。

平和とは当たり前ではなく、生きている私達が 自ら つくり出し 守り續けなければならないものです。

私の家では幼い頃から 8月15日の正午、高校野球の甲子園のサイレンが鳴ると同時に 毎年必ず
静かに 目を閉じ手を組んで「二度と戦争が起こりませんように」と“黙祷（もくとう）”をしました。
そして、15日の 夕食のメニューは 決まって「すいとん」でした。

江戸っ子の両親、特に母は 東京の中心地 新宿区で生まれ育ち、幼い頃に 東京大空襲にも遭いました。
眼の前で 自分が育った家を失い、町中のすべてが みるみるうちに 焼け野原と変わり果てていく様子、
あちこちで立ち叫ぶ人々の姿を目の当たりにしながら、その絶望の暗闇の中で、訳も分からずに 毎日、
ただひたすら 生きることだけを考えるしかなかったそうです。その中に在って、母の母である祖母が
逞しい精神力を持った女性で、どんな時も前を向き 希望を捨てずに 家族を守り抜いてきたおかげで、
貧しさやひもじさに 苦しむこともなく、あふれる愛情とエネルギーの中で、兄弟達や 周りの人達と
力を合わせ 助け合い 支え合いながら、母自身も 明るく 生き續けることができたと言っていました。
8月15日、母は 皆と共に 天皇陛下の 玉音放送を聞き、日本が 戦争に負けたことを 知りました。
皆が 敗戦に泣き崩れている時、母は思ったそうです。「明日からは もう爆弾が降ってこないんだ」と。

それが 心の底から嬉しかったと しみじみと話していました。空から 爆弾や銃弾が落ちてくるなんて
今を生きる私達には そんな日常生活が 全く想像出来ません。けれども 母は毎年『すいとん』を作り
戦禍で生きた 自らの経験を 時に淡々と 時に熱く 時に涙を流しながら 毎年必ず 私達に語りました。

「戦争中は 野菜なんて何にもなかったの。でも すいとんは ごちそうだった」とお椀の中を眺めた後
遠い目をして呟いていた顔が忘れられません。空襲警報が鳴ると 町中の電灯が消され 皆 息をひそめ
空が真っ暗になった瞬間に 爆弾が次々と降ってくる。だから 空襲警報の度に 怖くて震えていたこと。
ある時、いつも隠れていた防空壕の中で 先に逃げずに顔見知りの煙草屋のおじさんおばさん夫婦が
投げ込まれた手榴弾で 真っ黒に焦げて死んでしまっていた姿を見た時は、あまりの衝撃で しばらく
心が癒されなかったこと。大きなドラム缶でお風呂を作り 底が熱くなるので 大人用の下駄を履いて
兄弟で順番に湯船につかっていたこと。ついに終戦を迎え、その日から 周りの大人達が 子ども達を
守りながら 来る日も来る日も 力を尽くして働き続け 必死になって復興を目指していたこと。そして
中でも印象的だったのは、敗戦によって 天皇陛下が 国の一番ではなくなり 人々が戸惑っていたこと。
敗戦という想像を絶する悲惨な状況の中で、家族や周りの人々と共に 命だけを守りながら生きてきた
母の 様々な思い出話には、人生の大事な時間を 戦争に奪われてしまったことへの 深い怒りと憤りが
いつも込められていました。「人として 決して忘れてはいけない」との祈りをもって、8月15日に
すいとんを作り 戦争を伝えた母が、話の最後に必ず言っていた言葉は今も私の心に深く残っています。

「形ある物は壊れ 失われていく。人が生きていく中で絶対というものはない。人の心も移り変わる。
社会の価値観も 法律も 文化も みな人が作ったもの。変わりゆくもの。絶対的なものではない。」と。
戦争を通し、恐怖と人の惨さを体感し、敗戦国日本の激動の日々の中で 深い悲しみ苦難をくぐり抜け、
すべてを奪われ 何も無くなった時に、最後に求めたのは “永遠に 変わらないもの” だったそうです。
母は “戦争” という体験を通して “敗戦” という悲しみと苦しさ、屈辱や不安など あらゆる絶望を
味わったことをきっかけに、目に見えないものにこそ 価値を見出す生き方へと 大きく変わりました。
「親として 子ども達に残していくものは、目に見える 物やお金などの財産ではない。あられる愛情、
教育や 礼儀、知恵などの 人として生きるための術、そして 永遠に変わらない存在（神様）を知らせ、
自らが生かされている その命の源へ 想いを馳せ 人を信じ 赦し 愛する心（信仰）を育てることだと
そう確信して、私は 生きてきたよ。」と 真っすぐに 私と弟の顔を見ながら 静かに言っていました。
戦争は 人間力超える “人災” です。人の心の最大の悪であり罪です。決して繰り返してはなりません。

愛する母の生き様を心に、今年もまた75年間のこの国の軌跡を想い 平和を守り抜いてきた先達の
尊い遺志を継いでいこうと改めて思われています。そして今年は コロナ禍の中での終戦記念日です。
この国の未来を生きる子ども達のために 神様が創られたこの世界が 平和であり続けられますように
私達人間の心が どうか自然をいつくしみ、いつも 安らかで温かく想い合える世界を築けますように
神様の愛と平安が すべての人の心に 豊かに注がれ続けますように 心からお祈りします。（石田 記）

『平和をつくる者は 幸いです。その人は 神の子どもと呼ばれるからです。（マタイ 5：9）』